

教員間コミュニケーション活性化の方策 ー授業参観の日常化による相互理解の試みー

所属校：世田谷区立中里小学校
氏名：奥山圭一
派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：コミュニケーション・相互理解・授業参観・校内研修

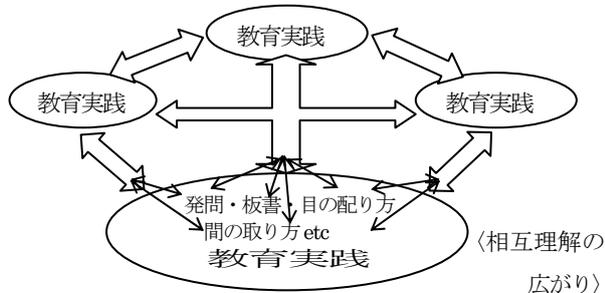
I 研究の目的

1 問題意識

現在、学校において、教員は授業以外にも様々な対応に追われ、とても多忙な状況に置かれている。また、学校組織の個業化の進展なども加わり、教員同士の教育実践に関する日常的なコミュニケーションが減少してきているように感じられる。そのことで教員同士の関わりも薄れ、お互い実践を十分に理解し合えていないのではないかという状況が見られる。そのような状況の中で、教員同士が学び合い、高め合っていく関係を築くことは難しいと考える。

2 本研究の目的

本研究は、教員同士がお互いの教育実践に関する理解（相互理解）を深め、コミュニケーションを活性化することが必要であるという仮説を基に、教員の相互理解を広げ、深めるための方策を構築し、事例校における試行によりその効果を検証することを目的とする。



II 研究の方法

1 相互理解を図る方策の構築

教員同士が、お互いの教育実践について理解することを相互理解と捉え、相互理解を図る方策として以下の2つの方法を構築した。

(1) ちょこっと参観

教員相互が日常の授業を参観し合うことによって、相互理解が図られると考え、授業参観の方法を工夫した。

① 短時間の参観時間

多くの授業を参観することを目的とするため参観時間を10分程度とした。これにより、年間6回

の参観期間を設定した。

② 「ちょこっと参観メモ」の記入

参観した授業で気がついた点について「ちょこっと参観メモ」に記入する。このことで、参観者は授業者への理解を深めるとともに、授業者も自己の省察に生かせるものと考えた。

(2) 実践交流会

教員相互が、日常の教育活動の取組を、紹介し合うことで、相互理解が図られると考えた。

① ワークショップ型の導入

交流会というワークショップ形式を取り入れることで、全ての教員が主体的に参加できるようにした。

2 検証方法

相互理解を図るための方策としての「ちょこっと参観」「実践交流会」の有効性を以下の方法で検証した。

(1) 文献研究

教員間のコミュニケーション、相互理解について先行研究より、その関わりや活性化の方策について分析、検討を行う。

(2) 調査研究

「ちょこっと参観」「実践交流会」の効果を検証するため、質問紙調査、聞き取り調査、アクション・リサーチを行った。

事例校において実施された、平成20年4月から12月までの8ヶ月間を対象とする。

① 質問紙調査

「ちょこっと参観」「実践交流会」実施後の教員の参観の実施状況や相互理解に対する意識の変化を分析するために実施する。

対象は、事例校に所属する教員14名とする。

② 聞き取り調査

質問紙調査の結果を補足するために、質問紙調査に回答した教員から抽出した7名を対象として実施する。

③ アクション・リサーチ

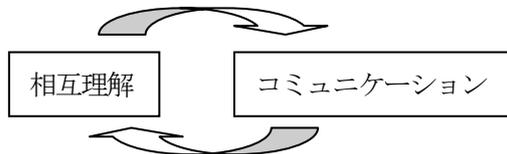
本研究は、特定の事例校を対象として進めていくことから、自ら所属する学校の課題に対し、自ら

具体的な改善策を立て、実践し効果を検証するというアクション・リサーチの方法を援用することが適当であると考えた。

Ⅲ 研究の結果

1 相互理解とコミュニケーションの関わり

先行研究においても、日常の授業の公開により教員間のコミュニケーションが活性化することが指摘されている。また、ワークショップ型の研修を実施することにより、コミュニケーションが活性化していくことも指摘されており、日常の授業実践を交流することが、コミュニケーションの活性化に有用であることは明らかである。また、相互理解が進むにつれて、コミュニケーションが活性化することも指摘されているところから、相互理解とコミュニケーションの活性化に有意な関係があることが明らかである。



2 プログラムに対する教員の意識変化

事例校において、「ちょこっと参観」「実践交流会」に対してみられた教員の意識変化は、次に述べる4つの時期に分けて特徴付けることができる。

- (1) 導入期：2つのプログラムに対する期待感の高まりと、実施への不安感が混在していた時期
- (2) 確認期：実際に取り組むことにより、プログラムの有用感が個々の教員に確認された時期
- (3) 停滞期：不安が現実のものとなり、プログラムに対する負担感が見られるようになってきた時期
- (4) 改善期：事例校において、2つのプログラムが、日常的なものとして教員の意識に定着してきた時期

このような経緯を辿ることによって、本プログラムが、提示された方法をただ実践していくことから学校の実態に沿った方法へと再構成され、相互理解を促進するためにより有用な方策となっていった。

3 教員間の相互理解の変化

本プログラムを試行していくことで、事例校の教員の間には他の教員の様々な実践を知るだけでなく、授業の進め方や児童への関わり方について気兼ねなく聴き合えるようになるという相互理解の広がりがみられるようになった。それとともに、他の教員の実践を認め合い、自らの実践に取り入れていこうとする、自らの

実践の振り返りに活かすという相互理解の深まりに繋がる意識の変化もみられるようになった。

4 教員間の相互理解の変化の特徴

相互理解への教員の意識変化には、教員経験年数や担当する児童の特性、個人のパーソナリティにより相互理解の広がり方や深まり方に相違がみられた。

(1) 教員経験年数による相違

経験のある教員の方が、教育実践の内容について、相互理解の広がりが大きかった。

(2) 担当する児童による相違

特別支援通級学級担任に、普通学級の担任の日常の教育実践に対する理解の広がりや深まりがより多くみられる。しかし、通級学級担任の実践が、普通学級の担任に十分理解されるまでには至っていない。

(3) 個人のパーソナリティによる相違

他の教員と関わりながら教育活動を進めていくことの少ない個業的な教員にとって、意図的に関わりを持つ場ができることで相互理解の広がりが見られ、より深まりを求める意識が多くみられた。

Ⅳ 考察

1 教員間のコミュニケーションの変化

本プログラムによって、日常の授業を参観する、日々の実践を紹介することで相互理解が進み、教員間のコミュニケーションも活性化への兆しが見られるようになってきている。それだけでなく、「参観めも」や感想の交流も取り入れることにより、教員間の授業を中心とした教育実践にかかわるコミュニケーションを広げることができた。

2 校内研修としての有用性

相互理解が進むことで教員間の垣根が低くなり、話しやすい環境が生まれ、実践を相談し合うようになる。また、若手教員は、短時間の参観でも自らの実践に活かせることを多く学んでいる。このことから、本プログラムを実施することで、授業力の向上につながるということが予想されるコミュニケーションがみられるようになった。

3 今後の課題

コミュニケーション活性化に資する他の要因である校内での役割、管理職やミドルリーダーとのコミュニケーション、学校が持つ風土と相互理解との関わりについても検討していく必要がある。